

多頭飼育対策推進モデル事業自治体の取組み紹介②

「東京都台東区における多職種連携に向けた取組～命のバトンプロジェクトから見てきたもの～」

高松純子氏 台東区台東保健所 愛護動物管理 係長

台東区台東保健所愛護動物管理担当の高松です。最初に東京都台東区の紹介と、多頭飼育対策に至った経緯として「台東区命のバトンプロジェクト」の説明から入らせていただきます。

こちらが台東区の地図です。西は上野、東は浅草を中心とし、江戸から東京へと続く歴史と文化を受け継ぎながら、産業・観光・文化の拠点として栄えてきました。お祭りなどのイベントが多いのも特徴で、多彩で個性あるまちがギュッと集約されています。台東区の地域特性としましては東京 23 区のほぼ中央に位置し、面積は 23 区で最小です。上野・浅草などの観光地を有しているため、これは新型コロナウイルス感染症拡大前の数値になりますが、年間 5,500 万人以上の観光客が訪れる国内有数の観光都市となっています。また面積 10 km²の中に約 20 万人が暮らす国内 5 位の人口密度で、区の約 70%が商業地域です。その他、東京 23 区の中でも高齢化率が高いという地域特性がございます。

そのため、商店街では長年ネズミ対策として、猫の放し飼いや餌やりが慣習化しており、飼い主のいない猫、以下長いので野良猫とさせていただきますが、野良猫が増加し続けていました。また下町の人情があり、昔から野良猫に寛容です。特に谷中は猫の町として有名で、外国人向けの観光ガイドにも載っているほど観光客に人気です。そして高齢化率が 20%を超えているため、近年は高齢飼い主の死亡や長期入院など健康上の理由から、飼い犬・飼い猫の飼育困難事例が発生してきました。

そこで台東区では、犬猫の殺処分数削減のための取組として、平成 28 年度から「命のバトンプロジェクト」を展開しています。これは飼い主の飼養責任を徹底すると共に、野良猫の繁殖制限や、犬の保護譲渡を推進していく取組です。動物の殺処分数を削減するためには、動物愛護センターに収容される動物を減らす入口対策と、収容された動物を新たな飼い主に譲渡する出口対策の両方が必要です。そこで東京都及び東京都獣医師会の台東区の先生方と連携しまして、「つなぐ命」として、犬については出口対策である保護犬の譲渡推進を行っています。こちらは（平成 25 年に）環境省が立ち上げたモデル事業「人と動物が幸せに暮らす社会の実現プロジェクト」の 1 つとなっています。また「見守る命」として、猫については入口対策である地域猫活動の支援を、地域猫ボランティアや地域住民、町会の皆さんと連携して行っております。

台東区ではこの 2 つを重要施策の 2 本柱として、環境省及び東京都と共に殺処分数の削減に取り組んでまいりました。特に地域猫活動の支援につきましては平成 17 年度から開始し、令和 2 年度までの 16 年間の取組で、一定の成果と今回のテーマである多頭飼育問題が根源にあることがわかりましたので、その推移と共にご報告します。

こちらは地域猫ボランティア数のグラフです。届出制度を始めた平成 20 年度からのカウントですが年々増加し、令和 2 年度で 455 名となりました。次に手術助成件数です。累計 4,416 頭の野良猫に繁殖制限手術が行われました。

16 年間の取組の効果を検証しました。野良猫の生息数を取組前後で比較することはできないため、検証に当たり指標として、猫の苦情相談件数、路上の猫の死体数いわゆるロードキル数、そして猫の引取頭数の 3 つを選択しました。こちらがその結果です。全ての指標で右肩下がりに減少しているのがおわかりいただけると思います。特に子猫につきましては、平成 27 年度に引取数ゼロを達成して以来、殺処分ゼロを継続しています。

現在、台東区では野良猫の手術がほぼ完了し、野良猫問題は終盤にきています。しかしこのサイクルのように多頭飼育者が家の中で増やし、放し飼いするとまた野良猫が増加し、苦情も増えていつまでたっても地域猫活動が終わらないという悪循環となってしまう。台東区で地域猫活動の支援を開始してからおよそ 12 年後の平成 28 年度辺りから、各ボランティアの管理地域（での地域猫活動）が一段落し、区内の野良猫の数も減少してきました。すると「毎年、どうも同じ方角から子猫がやってくる」というのが見えてきて、隣接地域を調査してみると多頭飼育の家があることが判明しました。つまり、ダムの水に例えますと、満水のときは水面下の蛇口（の場所）がわからないのですが、ダムの水位が下がってくると初めて蛇口が見つかるように、野良猫が減ってきて、ようやく蛇口となっている多頭飼育者を発見できるようになったのです。

しかし、保健所が話に行っても、多頭飼育者は「保健所に猫を連れていかれてしまう」と誤解して、天岩戸のように頑なに玄関を開けてくれません。そこで、地域猫ボランティアさんや町会の方が飼い主にアプローチしてくださり、解決に導いてくれました。つまり、地域猫活動で「地域力」が醸成され、その結果、多頭飼育の早期発見と解決に繋がったといえます。さらに「地域力」の素晴らしいところは、解決した事例は、その後も地域での見守りが継続するため、再発の抑止力にも繋がるところです。

行政にとって「地域力」とは、地域住民が地域課題を解決に導く力であり、住民自治の考えに基づく理想的な解決手法だと言えます。この地域の力は多頭飼育問題だけではなく、例えば、高齢者対策や防災、防犯にも応用が可能です。こうして地域住民の方と繋がるようになりまして、民生委員さんや社会福祉士、それからケアマネジャーさんなど福祉関係の方々の方がより住民と密着しており、地域の実情に詳しいということが見えてきました。さらに多頭飼育などの地域課題にもいち早く察知し、発見が早いことがわかってきました。そこで一部の福祉職の方々のご縁があって繋がりまして、自分たちでできるところから少しずつ勉強会を重ねていたところ、環境省から今回の多頭飼育対策推進モデル事業の話があり、東京都と共に参画をいたしました。

最初に台東区の多頭飼育の現状と、どのタイプに属するのかを把握するため、庁内関係課や地域関係者に協力を依頼し、アンケート調査を行うことにしました。調査のため、飼い主と接点のある地域関係者を考えるにあたり、庁内のどの部署にどのような方がいらっしゃる

かわからなかったので、環境省の多頭飼育対策ガイドラインの 40 ページ、こちらを参考としまして、関係組織を洗い出しました。動物職は福祉職と通常業務でありあまり接点がないため、まずはこの図に自分の自治体の組織を落とし込むところからスタートするとよいと思います。

それがこちらの図になります。庁内関係課だけでなく、民間の動物病院や保護譲渡団体など今回のアンケートは多職種にお願いしたため、回収に時間がかかっており、まだ精査中ではありますが、現時点で多頭飼育崩壊に該当する事例はありませんでした。

またアンケート結果から、多頭飼育というより、高齢飼い主など世話をする人がいなくなり動物だけが残される「タイプ 3」の傾向が高いことがわかりました。多頭飼育は崩壊してからでは遅いといわれるように、動物が取り残されてからでは遅いと考え、台東区が多頭飼育対策は、主に高齢飼い主への普及啓発を行っていくこととしました。

まず、元気なうちから準備してもらえようシニア世代向けパンフレットと、福祉関係者の方には、ペットがいる訪問先で活用してもらえような支援シートを。そして動物関係者の方には、動物の終活を考えてもらえようなパンフレットを作成しまして、飼い主の備えと地域の見守りで多頭飼育問題の未然防止を図っていきます。

また、パンフレットには地域関係者が探知・発見した場合は保健所に連絡が来てすぐに対応できるよう、飼い主や地域関係者の相談先として、保健所の窓口を掲載します。さらに個々のケースについて事例検討を行いまして、多職種で連携し、早期解決と再発防止を目指します。そして野良猫については、入口対策としての地域猫活動の支援と、飼い犬・飼い猫については、新たな入口対策として民間団体の保護譲渡活動の支援を行いまして、「台東区命のバトンプロジェクト」として、さらなる殺処分数の削減に取り組みます。

なお、今回の多頭飼育対策推進モデル事業の一環として、台東区にて多頭飼育対策講演会を予定しておりましたが、感染症の拡大を受けまして動画配信にいたしました。こちらはオンデマンド配信ですので、いつでもどなたでも視聴可能です。特に福祉関係の皆さまには、お忙しいとは存じますが、お時間のある時にご視聴いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、このスライドをもう一度お示しします。この図は野良猫問題の解決図ですが、この多頭飼育問題についても、さらに福祉関係者や動物関係者の皆さまと連携した「地域力」の強化で、解決を目指していきたいと思います。近い将来、新たな解決図をご紹介できることを楽しみにしまして、私からの報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。